Identity

桐生 拓人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉｄｅｎｔｉｔｙ

【Ｎコード】
Ｎ５５４８Ａ

【作者名】
桐生　拓人

【あらすじ】
常に賢者の石に関する情報を求めて、アメストリスを右往左往する若き国家錬金術師のエドワードとアルフォンス。しかしなかなか休もうとしないエドワードに弟のアルフォンスは心配で仕方がない。　そんなところから始まるこの話。あの某司令部のロイ・マスタング大佐の意外な一面が見られる可能性あり??家族（?）とは何かがそこはかとなく感じれれば…

（前書き）

とっても平凡な上、それなりに短いです。シリアスをお求めの方はブラウザでお戻り下さい。

私が君たちの帰る場所になるから

だから安心して帰っておいで

―――Identity

エドワード・エルリックは固まっていた。
中央司令部の最奥に属する司令室の前で、扉を開けたまま文字通り、棒の様に突っ立っていた（目撃者談）
今回有力だと思われていた賢者の石の噂話は真っ赤な偽者で、気落ちしつつもようやく北の方の町で有力な情報を掴み、いざ旅立とうとしていた所にロイ・マスタング大佐の緊急の呼び出し。慌ててきてみれば呼び出した当の本人が姿を消している。
エドワードは今、心から後悔していた。
あぁ…何故、如何してオレはこんなヤツの下についちまったんだっ！！
「…疲れた……」
そのまま扉を潜れば、つい最近新調したばかりだという真新しいソファとテーブル。その奥には深い色合いの業務用デスクと、今は主人のいないずっしり構えた革張りの座り心地のよさそうな椅子。そんな椅子も全く見えなくなるほど、所狭しとデスクに積み上げられた大量の書類の山。気丈にもデスクは、その未知なる重さに耐え続けている。偉いぞデスク。さすがだ軍支給品。まるでこうなる事が目に見えていたかの様。
ここまでの結論。無能なロイ・マスタング大佐殿はオレを置いて逃げたって訳だ。ふーん。

「ついてねえ…ホントついてねえ…」
最早怒る気力も消え失せた。呟いたや否やエドワードは大量の書類と共に、仄かにアイツの匂いが残る椅子へとダイブした。目覚めた時こそアンタの人生の終着点だ。心の奥底で誓いながら。

ロイ・マスタングは固まっていた。
卓上の書類の山に嫌気がさし、逃亡を図って軍部内を彷徨っている所をホークアイ中尉に見つかり、連行されてきたのが今し方。
大量の書類に埋もれるようにして眠る予想外の客人に、ただ呆然とするしかなかった。
「こんなに早いとは…」
確かに呼び出したのは自分だが、彼のことだからまた嫌だとか行きたくないとか言って散々弟を梃子摺らせるだろうと思っていた。しかしここにいるとなれば。
「早急に終えないと」
それからのロイ・マスタングは、仕事場をデスクからテーブルへと変えて、殺人的な速さで書類の山を崩していった。それを見た部下が感極まってほろりと涙したのも、ホークアイ中尉が密やかにほくそえんでいた事も、口外できない暗黙の了解となっていった。

「おかしい…」
自分は椅子の上で丸くなっていたはずだったのに。
目を開けた途端、視界に入ったのは見慣れた天井。
「おかしーなぁ…」
「何がそんなにおかしいのかね？」声のする方へ目を向ければ、心に（違う意味で）誓った運命の人ロイ・マスタング。
「ハッハッハ。此処であったが百年目だ。今日こそ積年の恨み晴らしてやる」
「寝ながら言うセリフじゃないねそれは」
その言葉にむっとしたので、両足を軽く上げてから勢いよく起きあがってからいった。
「だいたい人のこと呼び出しといて何だよ。書類の山残して消えやがって」
口を尖らせれば、ロイは苦笑していった。
「いや、まさか君がこんなに早く来るとは思わなくてね。慌てて書類を片付けたよ」
「へぇ。……ってあの量を?!」
確か自分が最後に見たときは、とても今日中に終わる量では無かった筈だが。超人かよ…。
「可愛い君のためだからね。終わってみれば既に中尉がアルフォンスにアポを取ってたのでお持ち帰りの許可が出た。その後なかなか起きない君をだき抱えて、ハボックに私の家に送らせたんだ」
わぁ、なんて段取りがいいんでしょう。そしてオレには拒否権そ

の他なし？
「さぁ、下に行って飯にしよう。腹が減ってるだろう」
そう言われてみれば、ほのかにただよってくるシチューの香ばしい香りに景気よく腹の音が鳴る。
「そういやさ。なんなの？急用って」
少しの恥ずかしさを誤魔化すために慌てて話題を変える。
そうだよ。すっかり忘れてたけどコイツのために態々北の町からすっ飛んできてやったんじゃねーか。
「あぁ。君の欲しがっていた南方の図書館の禁書が運良く手に入ってね」
途端にエドワードの眼が爛々と輝いた。この時ばかりは本当に別人のような変わり身の早さだ。たとえ夕飯の支度の途中だろうとそれは変わらない。
「マジで？！お願い大佐！貸して？！」
「ただし条件がある」
ロイの言葉に一瞬怯んだ。そういう時は決まってこっちが不利になるような条件つけやがるんだから。
「今日は夕飯を食べたらさっさと寝なさい。明日起きたらアルフォンスも呼んで、二人でゆっくり読んでいっていいから」
思いのほか悪くない条件に、エドワードは目を丸くした。確かに文献は今日読みたいけど、アルフォンスのためにも明日にするべきだった。そうして悩んだ挙句、了承したのだが。
「如何したんだい？早く食べないとシチューが冷めてしまうよ」
と、満面の笑みで攻められては、さすがにエドワードでなくても引けるものがあっただろう。

―――それから数時間後

「…オイ」
就寝のため宛がわれた客室で、ベッドに入ったのは良いけれど。
「何でテメェが此処で寝てんだよ！！」
ふと気がつけば目の前にはロイ・マスタング。
しかもちゃっかり背中に腕が回っているため、逃げようにも動けない。顔でも抓ってやろうと思って顔を見上げた途端、息を呑んだ。
「……んだよ。そんな寂しい顔されちゃったら、退くに退けないじゃん…」
とうとう諦めて大人しく腕の中に収まると、瞳を閉じた。
「オレもアンタの拠り所になってやるよ…」

静かに寝息を立て始めた子供に、ロイはそっと呟いた。
「ありがとう」

私も君もアイデンティティだから

互いに無くてはならないんだ

いつでも帰っておいで

私も君たちの帰る場所になるから

end

（後書き）

……今度はまた違った趣向のものを書いてみたいと思います

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5548a/

Identity

2010年10月10日19時40分発行